

一の俣温泉には設備のよい立派な温泉ホテルがある一方で、昔ながらの素朴きわまる共同浴場もある。一步まちがえば、いや入れば、つげ義春にでもなれそうなその浴槽には、お湯が半分くらいしか溜まっていない。願うまでもなく、半身浴が楽しめる。半身浴は寒くてかなわぬので長湯につながり、せっかち男も長湯でいづから健康になろうというものだ。

夏には蛍が明滅するに違いない一の俣川。まさにその川の上に浮かぶようにして、この湯の休憩所はある。ある意味、日常がこびりついたようなたたずまい。「つげ度」、急上昇。リアル過ぎる。ここは、寝っ転がるしかない。寝っ転がって、持参の黛まどか句集『忘れ貝』（文學の森）など開き、そのまま眠ってしまったら、無意識の闇に句が灯ってくれるかもしれない。

金木犀ほのか夜長の朧とす

〔金木犀〕と「夜長」、二重季語の疑いがある

別な温泉地で昨年、見も知らぬ人からいきなり「キミいくつ？」と尋ねられ、ムツとしつつも正直に「50ですが、それが何か？」と答えた。

すると「ボクはこう見えてももう60なんだけど、50から60までアツという間だよ」と一人悦に入りながら言葉を継ぐ。裸でない時すら隙だらけの小生に、光陰と矢がイコールであることの実感を伝えたかったらしい。

しばらくあとに参加した句会で「湯煙やにわかには問はれはや五十路」を投句したところ、ベテランの方より、こんどはこれは「無季」だとして指摘。てっきり「湯煙」を秋か冬の季語だと思い込んでいたのだ。ここでムキになってキレていては、俳句は上達しない。

キレといえば、俳句でよく用いられる「や」（例「古池や蛙飛びこむ水の音」芭蕉）などを「切れ」とか「切れ字」といって、これは俳句特有の技法だそうである。ひとまず本人が見て言及しようとする現実の対象を提示し、その同じ単語から万人が描くイメージを重ねようとする役割が、このたった一文字にある。

ところで、季語にしばられたくない、字数制限にもとらわれたくないという人は、種田山頭火に代表される自由律俳句という道がある。

まごまご生きて半世紀

〔開き直って反省が感じられない〕

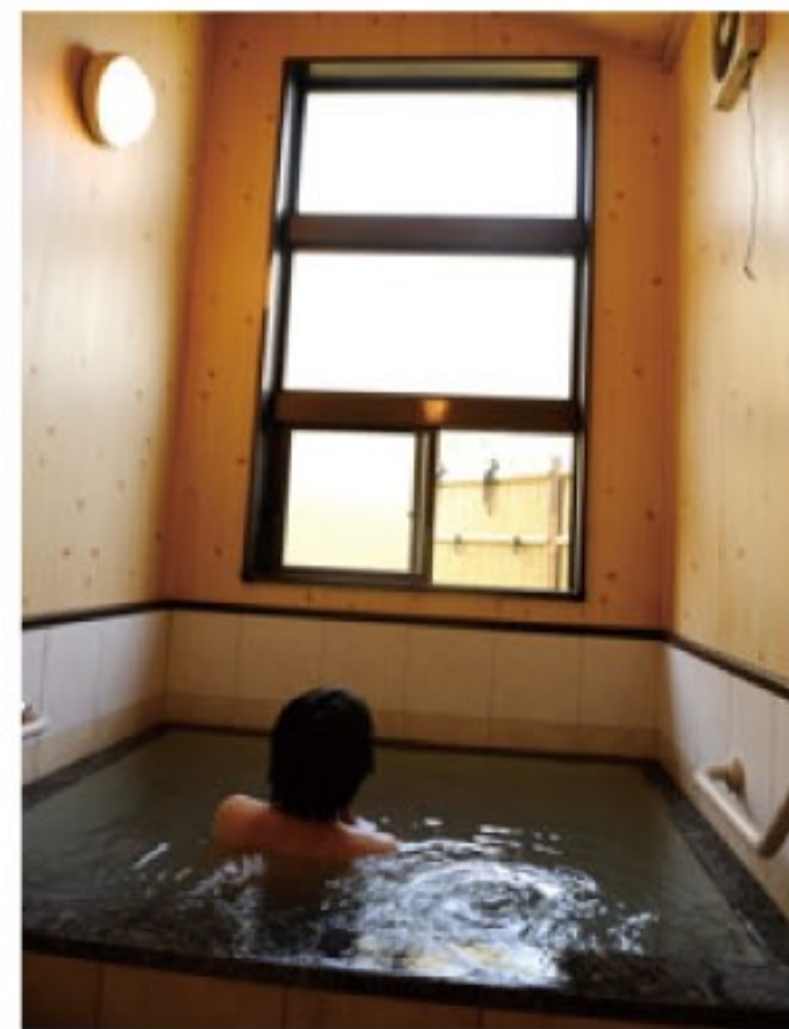


右＝一の俣温泉の大衆浴場。孤独と瞑想の中、迷句あれこれを。

上＝リアルな休憩所は昭和の記憶を呼び覚まし、回想の俳句が生まれそう。



家庭の風呂のような日野温泉。





一の俣温泉観光ホテルの露天風呂。ぬめりのある湯が肌にやさしい。いろいろと病気をかこつ年齢になれば、それも俳句の素材ともなる。



HOTに楽しむ俳句入門

温泉はしご入浴レポート

温泉に入りまくって、習いかけのへたな俳句を詠む前に、まずはインターネットで下関市内の温泉数を調べてみた。一、二、三……十七カ所。5+7+5=17音の俳句と同じではないか！これは幸先がよい。下関のいで湯は俳句の泉だと、独り合点したのである。

勢いづいて、とある温泉の露天風呂に入ると、そこに下関の相当な温泉通の人がいた。平日の午前中だったのだが、下関へ単身赴任中というその男性は、その日代休。温泉巡りが趣味という。市内全域の温泉に詳しい。質問を連発。

「華山と書いて『げざん』と読む温泉をご存じですか？」

「ああ、あれは今、日野温泉っていうんですよ。看板も出てない集会所みたいな温泉だね」
教えられて入った「日野温泉憩いの家」はよかった。常連のおばさんたちとすぐに友だちに。

朝霧や汲めども尽きぬ露天プロ

（焦点が定まっていない。駄洒落はいただけない）

集会所と見まごう日野温泉「日野温泉憩いの家」。



「道の駅 蛸街道西ノ市」内にある螢の湯の入り口。露天風呂やサウナもある。ふるさとバイクの前後に楽しむ人も多い。



文 福田章（本誌・編集人）